

地域社会人を活用した教養教育 —地域に広がる知の循環型社会実現を目指して—

大橋 眞¹⁾ 斎藤隆仁¹⁾ 中恵真理子²⁾ 光永雅子²⁾

1) 徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部

2) 徳島大学全学共通教育センター

1. はじめに

持続可能な地域社会を育むために、様々な方面において大学の果たす役割が求められてきている。大学の地域貢献の中でも、地域の教育基盤の整備への貢献がとりわけ重要な課題である。地域に根ざした教育基盤の整備は、社会的資産として次世代に引き継がれ、将来の発展に重要な役割を果たすことが期待される。超高齢化社会の時代の到来に関して、高齢者層の人口増加に伴う医療福祉関係の予算増が懸念されている。その一方で、社会の人的資産として豊かな社会を実現するためにも、適切な高齢者の人材活用を様々な分野で行う必要がある。有能な高齢者層の人材活用を図り地域社会の教育力を高める様々な取組を実現していくことが重要な課題である。中教審答申「新しい時代を切り拓く生涯教育の振興方策について ～知の循環型社会の構築を目指して～」は、「国民一人一人の生涯を通じた学習支援」と「社会全体の教育力の向上」を二つの具体的方策の柱として、国民の生涯学習を支援することにより社会の教育力の向上を図り、新しい時代にふさわしい社会基盤の整備を目指すことが必要とされている。このように生涯学習を社会の教育力向上との関連により、その意義を位置付けている。今回の取組の目的は、このようなこれからの日本に必要な地域社会における社会関係資本の強化のために、大学が中心となって地域の教育力を高めるための方策を確立して、地域の知的資産を大学教育において活用する仕組みをつくることにある。

2. 地域社会人を活用した教養教育

徳島大学では、全学共通教育において、平成20年度より教養科目群とは独立させて、社会性形成科目群を設置した。社会性形成科目群の一つ

の共創型学習において、学生と教員と共に授業を作り上げる形式の授業を開設した。共創型学習は、様々なテーマの体験を通して、コミュニケーションを図りながら、お互いに学び合うことで、創造的な成果を出すことを目指している。これまでも、福祉やものづくりなどの授業で、地域の社会人の協力の下に体験を取り入れながら、コミュニケーション力やプレゼンテーション力を育成することに力を入れてきた。地域に在住している社会人中で、大学教育に造詣の深い地域社会人を公募により集めた。会社員（元役員や社長を含む）、薬剤師、鍼灸師、福祉関係者、元高校教、元大学職員、塾講師、自営業者など多彩な経歴を持った人材を集めることが出来た。これらの応募者に対して、授業概要の説明会を兼ねた事前学習を行った。平成20年度、21年度は、前後期の授業開始時に各1回の事前学習の時間を設定した。平成22年度は、取組に参加する社会人のための自主学習会を毎週実施した。この事前学習においてお互いの意見を調整するとともに、様々な観点から学生教育に対する思いを交錯させることで、教育に参画する意識を高めると共に、意識の方向性をある程度収束させることを目指した。

地域社会人と対話をすることで、コミュニケーション力を高めると共に、社会人のキャリア意識を背景に、社会人の勉学に対する考え方を聞くことで、自立的な学びの重要性に気づききっかけになる。また、会話の中で社会人の口から語られる社会体験に基づく知識活用を知ることで、単に知識量を増やすことだけが勉学の目的ではなく、その活用法の体験的理解が必要であることを感じ取ることが出来る授業を共に作り上げることを目指した。さらに、授業のテーマに関して、自主的に学びを広げることにより、授業への貢献度が高ま

り、社会の構成員としての自身に対する認識が体感出来る。このような体験は結果として学生自身が社会の一員であるという意識が高まり、人間性形成と社会性形成に繋がるのが期待出来る。またこのような体験型の学習形態は、自主的な勉学に対する成果が極めて見えやすい形で自ら体感出来るために、学生の自立と、自発的な勉学への指向が高まっていくことで成長を果たしていくことを目標とした。

これまでの大学は、一般社会から隔離された側面があり、勉学が机上の学問に限定される傾向もあった。社会人が授業に参画する今回の取組を進める中で、大学と社会との関わりに関係する授業が展開できる可能性があることがわかってきた。授業に参加する社会人に対する出会いが新たな気づきの出発点であり、専攻の異なる同年代の学生との対比や教員との対比の中で、次第に多様な価値観や思考法の存在についてその背景を含めて考えることの出来る感性を育てることが出来ることが明らかになってきた。また、地域社会人が授業に参画することにより、教員と学生の関係では実現が困難であった学び合いの環境が、比較的容易に築くことができることが明らかになった。社会人参画の教養科目においては、社会人のコメントをヒントにして設問に対する意見をまとめるために、意見を聞きながら発言者の大筋を感じ取ることが必要であり、集中力を育むためのトレーニングとしての役割があることがわかった。

単なる世代を超えたコミュニケーション力の育成だけではなく、社会人の口から語られる大学教育の意義と勉学に対する姿勢が、教養の意義を自ら考えさせるきっかけとなり、自ら勉学の意味を考え直し、受動的な学びから積極的な学びへと考え方を転換する機会になる。このように、社会人の参画により「対話的コミュニケーションとしての学び」の環境を、少人数体験型の共創型学習だけではなく、大教室の講義のなかでも比較的容易に作り出すことが可能となった。これらの授業の中で、学生は学びに対する新たな発見をしながら自らの勉学姿勢を見直すことで、真の学びを実現していく自己啓発型の学びを体験させることが出

来た。

3. 今後の展望

このような講義形式の授業に、能動的な学びを目指す社会人が、受動的な学習姿勢の学生の中に入って共に学ぶことにより、受動的な学習姿勢の学生が刺激を受けて、学びに対する基本的な考え方を変えるきっかけになることがあり得る。無報酬の社会人が積極的に教室の中へ入ってくること自体も学生にとって、授業に対する姿勢に変化を生じさせるきっかけになる。これまでの受動的な姿勢での学びが基本であるという勉学姿勢を既に身につけて入学してくる大学初年次の学生が、その考え方の問題点に気づき、積極的な学びが必要であるという認識に立って学びに対する基本的考え方を捉え直すときに、その後の勉学に飛躍的な発展を遂げるきっかけとなる可能性がある。そのために、教員が授業のスタイルを工夫することにより、能動的な学びに誘導できる授業開発を積極的に行っていく必要があると考えられる。

さらに、地域社会人と教員との意思疎通を図るために、事前学習のプログラム開発が必要である。社会人のプレ教育を充実させることにより、教員と社会人の連携プレーがよりスムーズに行うことが可能となり、授業の方向性が明確になる。今回の取組の成果が、地域の様々な教育の場に活かされることで地域の教育力を高め、知の循環型社会の構築へとつながっていくことが期待される。